

子ども学とは何か(5)

——子どもの哲学の可能性——

黒田敏夫

要旨

中島義一著『こども認識論 林檎の味』を通して、子ども哲学(子ども認識論)の可能性について考察する。多くの子どもにとって、初めての哲学的問いは、本当の認識(知識)とは何かという認識論の問いではないだろうか。感覚的認識が不確かなものであるという疑いから始まり、与えられた存在の何が確かなのか、確かさの根拠は何か、という思索へと深まる。認識の仕方によってさまざまな真理が存在しているように思える。しかし、人間は大本の絶対的真理を見出そうと形而上学的問い(哲学的問い)を投げかけ探求していく。このように哲学的探求の道を歩み始める子どもたちこそ、自己の価値をも作り出せる自律的な自由を備えた人間になっていくのである。哲学的教育の目的は子どもたちの魂に語りかけ、覚醒の契機を与え続けることではないだろうか。

キーワード：子ども学，子ども認識論，哲学

はじめに

哲学は世界や人生の真理を問う学問である。その意味では、「神様っているの?」、「世界って何?」、「死ぬってどういうこと?」などの子どもの問いは難しい問いである。しかし、子どもであろうと大人であろうと、そのような形而上学的問い(哲学的問い)は根本的なものであり、すべての真剣な問いの根源にあるものである。むしろ、このような問いが多くの学問領域にとって無意味であると考えられるようになることこそ、現代の教育の大きな問題点であるといえないか。

この小論において中島義一の「こども認識論 林檎の味」の内容を紹介しながら、子どもにとっての哲学的な教育について考えてみたいと思っている。中島は一九一三年(大正二)に茨城県師範学校本科第一部を卒業し、母校の石下尋常・高等小学校に訓導として勤め、その後一九一八年(大正七)四月に広島高等師範学校教育科に入学し、一九二〇年(大正九)三月二五日に卒業し、同三月三十一日付けで「教諭兼訓導」として千葉県師範学校に赴任する。一九二五年(大正一四)まで同師範学校に在職する。この期間、千葉師範および同師範付小において「自由教育」の思想と実践との発展に尽力するのである。千葉師範附小「自由教育」は子どもが、自らの「理性的自由活動」によって「真・善・美」の「文化価値」を創造することを目指し、「動向・構成・反省」の三段階を子ども自身にたどらせようとするものである。「動向」とは、子どもが学ばんとする意思を「振起」することである。「構成」とは「自ら目的を設定し、当為の意識に従ってこれを実現せんとすることである。最後に「反省」とは、「自らなされた自律的構成的

活動が、はたして普遍的法則に合致しているかどうかを検する」ことである。¹

中島は意思に導かれて彼らの進むべき道を「教育は大人の生活の準備をさせるのではなくて、児童自らの生活を児童自らに生活させていくこと」²と述べている。子ども自らが感じ、考え、主体的に判断し、社会に参加していく、カント的な言葉で言えば自律的自由をもった子どもの教育を目指していると言える。

子どもの哲学関係の書物では、『ソフィーの世界』³が世界的に多くの人に読まれた。平易な文章、日常的な場面から、子どもの問いという形で哲学史上の問題が取り扱われていた。これまで哲学と言えば、難解な言葉で書かれているというイメージがあったが、子どもに分かる平易な言葉で哲学論争がなされていることが、多くの読者をひきつけたと言えよう。中島の「こども認識論 林檎の味」は「ソフィーの世界」より約70年も早く書かれたものであり、真理とは何かという大きな哲学的問いを持つことが何よりも大切であり、尊いことであることや、この問いを抱き続ける自律的自由をもった子どもたちを育てる教育の在り方の必要性を問うた本である。このことは、児童ばかりでなく生徒や学生たち、すなわち子どもや青年たちにとって不可欠の教育の目標である。

私も学生時代からカント哲学から多くを学び、教えられてきた。大学では微力ながら哲学を教え、「子ども学とは何か」を哲学の視点から考えているものである。以下この著作『こども認識論 林檎の味』を通して考えさせられたところを、見出しごとに、自分自身の子どもの頃の問いを胸にとめ、また教師として哲学的問いに目覚めていく若者を導くものとして、自由に考え、述べてみたい。

一 黒い眼でみたということが確かだろうか

僕（由二）と小川、前田、田島が釣りをしているときの議論である。小川が大きな魚を釣り落として残念だといっている。釣り落とした魚を見たという田島は、その魚は大きくなかったと反論する。二人とも「黒い眼で睨んだのだから間違いない」（4頁）という。証拠の魚が逃げてしまっているので議論は決着を見ない。「気のせいで見違えることはいくらもある」（7頁）、「見たということは全く当てにならない」。（10頁）「臭い」にしても「声」にしても本当のことはわからない。このように3人は感覚として与えられるものは疑わしいということに気づいていく。そして「本当ということはどんなことだろう。」（13頁）と思うようになる。カントの『純粹理性批判』は経験論が示す感覚的認識は不確実なものであること、習慣や記憶に基づく認識であると批判する。しかし、ここでの3人の議論はすべての感覚的認識が不確実であること、すべての知識を方法的に疑ってみるべきだとするデカルトの方法的懐疑の議論に似ているとも言えよう。

二 本当ということがあるのだろうか

僕（由二）の問いに対して姉は「誇大妄想狂」だと言って取り合わない。兄は学校では嘘は教

えていないだろうと、論点をそらして答える。僕は「本当のことはあるかないかわからないということを確認だとする。確かだということは本当だということだとすれば、本当のことはあるかないかわからないと疑うのは、意味のないことじゃないか。それだけでも本当のことがあるんじゃないか。」(21頁)という考えに至る。すべての知識を疑う懐疑論ではなく、理論理性で知ることのできない「物自体」についての認識についての判断停止の姿勢を示している。また算数のように確かな認識として成立している学問があることにも気づくのである。更に漠然とではあるが、真理を知りたいと思う人間の形而上学的欲求（哲学的問い）の大切さも感じていく。

三 盥^{たらひ}の淵のどうどう廻り

四 家内中での大議論

家族内での議論が続く。僕（由二）は本当ということは理屈ではあると理解した。しかし、今度は「一体本当ということはどんなことだろう。」(31頁)という問題にぶち当たる。クリスチャンであるお母さんは「本当っていうのはね。神様の言葉だけなのよ。」(33頁)と答える。お母さんにとって神様は嘘はつかない疑うことのできない真実の存在なのである。真理を保証する神への信仰の立場である。姉は「本当っていうことは主観的だと思うわ。」(35頁)と言う。二に二を足せば四になると誰だって考えるのでは？という問いに対して、姉は旧約聖書の創世記の神がアダムを創り、アダムからエバを創ったこと、またエデンの園での原罪の話を引き合いに出し、大体人間は似てできていると言って、「みんなが主観的であること」と「本当だ」ということの矛盾がないと言う。それに対し、僕は、僕たちの問題は僕たちで解決すべきだと主張する。お父さんは「本当と言うのはな、世間の人にな、みんな本当と思うことだ。それが本当だというんだ。」(38-39頁)と説明する。いわゆる世間のより多くの人がそうだと思っていることが本当だという考えである。近代市民国家を支えている多数者の意見をくみ取っていく功利主義的な手法である。この立場は、必ずしも絶対的な真理を求めないのである。

五 事実だということに間違いはないか

藤井と真ちゃんと僕は茸^{たけがり}狩に出かけ、「本当っていうことがあるかないか」(43頁)について議論をする。藤井はなぜそれが問題になるのかわからない。ここに松の木が沢山あることは事実だし、無いとは言えない、と考える。それに対し、僕（由二）は松の木は確かに存在するが、人々によって違って見えている、と考える。誰の目に見えたものが本当なのかわからなくなる。だが、藤井は「君は同じ松の木を見ていってんじゃないか。」(44頁)「誰の眼だって同じに出来てるんじゃないか。」(45頁)と抗議する。僕（由二）の理屈とは、本当のことがあるかないかわからないと確^{しつこ}と決定したとすると、わからないんだということが、本当でなくてはならないもので、逆に本当のことが無いんだということであれば、それが確かだということなら、ないんだということは本当だということになる、というものである。「だから本当のことはある、あるこ

とはあるのだということが理屈として正しいということになった」(48頁)と考える。

この理屈が果たして正しいかどうかは疑わしい。本当のことがあるかないか分からないという判断停止の立場から、いずれにしても本当のことがあるという積極的な結論を導き出すのは無理があるようにも思える。子どもの議論としてはかなり高度な理屈である。

六 それこそ認識論の問題だ

3人が「本当ってことはどういうことだろう」(54頁)ということを経験していると、西田先生が、「それこそ認識論の問題だ。」(54頁)と言う。西田先生は認識論とは、「知識論というのと同じで、知ることの起源や、知ることとはどんなことだとか、知ることとは本当のこと——真理を知るのだから知ったと言われたいのだが、その本当——真理ということとはどんなことだとか、そういうことを論ずる学問」(55頁)であると説明する。藤井は認識論の一つの立場、模写説のような考えを示す。「外のもの、心の中でわかったこととが一致すれば、それが本当だ」(59頁)という説である。この考えに対して、僕は異論を唱える。僕の心の中でわかったことと、他の人の心の中でわかったことを、神様のように、二人の心の中のものが同じだと言ってくれる方がいないとこの立場は成立しない。しかし、論理的に真理を保証してくれる神を安易に想定することはできない。

次に外的存在として考えられない点とか線について、西田先生は問いを投げかける。眼でみたり、手で触ったりできない、点や線の存在を疑うものはいない。考えるだけのものも本当ということはあるのではないかと問いかける。

感覚を通してとらえることのできる外的存在の認識についての議論に続き、最初から理性によって考えられた数学的存在の認識についての問題について考えていくことになる。

七 実用主義の伯父さん

田舎で商売をしている伯父さんが僕の家に来ていた。伯父さんは「商人は商人、官吏は官吏、百姓は百姓とな、それぞれ職業があるんだから、その職業に役にたつ知識が、それが本当のことだ」(71頁-72頁)と考える。しかし、僕は、「役にたつから本当なのではなくて、本当のことだから役にたつと思う。」(73頁)と反論する。確かに、本当のことはすべての性質を含むので、当然役に立つという結論を導き出すことができよう。(存在論的証明)しかし、この理屈は少し不毛の論理を含んでいる。純粋に理論的な学説(知識)が、その時代では役にたつたかわからなくても、後代において人類にとって有益な学説になったという例は、今の時代でもあるからである。

この問題は認識論の問題というよりは、実用的、実践的な問題であろう。役にたつ、たない、は実利的な課題である。カントの理論哲学の範囲で考えると、意味のある認識は思惟可能だけでなく、直観可能なものとして考えたところにあり、純粋に真に理論的なものならプラグマ

ティッシュでなければならぬという問題につながる課題である。

八 考えるということにだけ真偽はある

僕は自分の考えが行詰ったと悟った。そして、本当ということは、考える——判断するという
ことだけに言われることだということに気づいた。

子どもたちがこのような考えに至るということ、問いを発し、新しい認識に目覚めていくこと
は大切なことである。大人は子どもたちに問いを投げかけ、刺激を与え、常に新たな認識に導い
ていくことが大切である。しかし、この思考の道は答えが見えない道でもあり、大人自身がこの
道を通っていないと、子どもを導くことは困難なのである。

九 自由学習の時間に

僕は自由時間に一寸行き方が変わっていると思われる算術の問題を解いた。これが解けたと
き、誉められた時や甘いものを食べたときの愉快さとは違った愉快さを感じた。そして算術にお
ける本当ということは、多数決で決まることでもないし、すべての人が考えなければならないと
いう事柄でもないということに気づく。数学的真理はそれぞれの人の同意を得ることによってな
りたつような真理ではないことに気づくのである。

外的認識の問題から、ここでは純粋に理論的な数学的認識の独自性と、その普遍性に気づいて
いくのである。

十 いつ、どこで、だれが考えても

僕は真ちゃんと西田先生のお宅を訪ねた。先生との話のなかで、僕は、「二と二を加えると四
になるということは、僕がそう考えるばかりでなく、誰でも、いつでも、どこでも必ずそう考え
ねばならない。そう考えるより外には考えようがないことだから本当だということになる。」(96
頁-97頁)と確信するようになる。

「理屈の上にくい違いのないように考えていった」(95頁)、つまり正しい推論によって結論
に至る数学的認識の普遍妥当性の意味を確信したのである。

十一 真理は一つよりないか

三人の会話は更に続く。本当ということは「あることについて誰でも、いつでも、どこでもそ
う考え、必ずそう考えなければならないものだとしてだね、他の方から見ればそれと違ったよ
うに考えられるということもあるじゃなからうか？」(99頁-100頁)と真ちゃんが問う。例え
ば、光が白いか赤いということを、エーテルの波と見るのと、感覚と見る立場がある。物理の

立場からすると色を波長の違いとしてとらえ、心理学は感覚がとらえたものとして考え、どちらの立場も本当のものとして考えるのである。「同じことでも、見方を違えばいくつもの真理がある」(104頁)ということに納得していくのである。

理論科学が求める真理と経験科学が統計的に求める真理が質的に異なっているのではないかという問題はあるが、子どもたちがまず気づくこととして、一つの事柄に対しても、それぞれの学問によってとらえ方(方法論)が違い、そこから導かれた真理も異なってくるということを知ることが大切なことである。

十二 考えることのめあて(絶対的真理)

僕(由二)は「いろいろな方面から見られて、それからいろいろな真理が生まれる」(110頁)ということではもの足りないと思う。西田先生は、「それはもっともだ。そういう大本の真理のことを絶対的真理」(111頁)というと教える。西田先生は非常な熱をもって語る。「真剣に考えようとする人は、その絶対的真理をめざして進む。」(111頁)「苦しんで願わずにはいられないんだ。だがこうしためあてのために、人はわき道へそれもせずに、というのは利益や快樂に迷わされずに、まっしぐらに自分の道を進むことが出来るのだ。」(111頁)「この絶対的真理というのはな、真剣に考えようとする人を導いてくれる神様なのだ。」(111頁)

真理への正しい方向を見定め、絶対真理への探究の願いをもち続けることは、同時に利益や快樂に迷わされないことでもある。思惟の道、哲学の道はそれ自体、真理への道であるが、道徳的真理の探究の道でもある。知徳一致の道でもあろう。

しかしながら、教師として子どもたちをこのような哲学の道の入り口まで導くことは、至難の業である。まずは子どもたちの能力と可能性を信じつづけることしかできないのかも知れない。教師は自らの教育力に奢ることなく、若者の魂を覚醒させる契機にしかねないことを悟るべきであろう。

十三 良心の叫 神の声

僕(由二)は「何らかの見方をとる以上、その見方の上でだけの真理というものは考えられる。」(113頁)と理解した。それにも係らず、僕らはその大本の真理、絶対的真理を求めて止まない。「すべて真面目に考えようとする人は、誰でもこの絶対的真理——大本の本当のことを追うのでなければならない」(114頁)ということを知る。ここまでは理論理性的の課題だと言えるのであるが、更に実践理性的の課題に移っていく。

心の中の声に耳を傾け、「誰でも、いつでも、どこでも(真理を知ろうとする人は)必ず当にそう考うべきだ。」(116頁)という「当為(Sollen)」の声を聞くのである。西田先生は「自分の心の中にあるその『べし』に従うんだ。良心の叫び、神の声に従うんだ。そして自分から真理を創るんだ。さもなければ学問は進まない。」(118頁)と僕に教えられた。僕も、本当というこ

との意味がすっかりわかったと感じる。

ここでの到達点は、学問としての道徳論の根拠となる「理性の事実」としての良心の声、「当為 (Sollen)」の問題に入っているといえる。認識論の問題から子どもたちが道徳哲学の課題へと向かっていくのである。

終わりに

以上が、中島義一の『こども認識論 林檎の味』の内容にしたがって述べた小論である。カントの『純粹理性批判』⁴の内容に沿って構成された「こども認識論」である。子どもたちの成長にとって何よりも必要なことは、大きな真理への問いを続けることである。つまり人間の本質と直結している形而上学的問い（哲学的問い）をもつことの尊さを課題としていると思える。ここでは、認識論についての問いを扱っているのであるが、決して狭い専門領域における真理ではなく、常に大きな真理を求めていく思惟の道を歩むべきことを訴え、思惟の道の尊さが熱く語られている。

中島は、カントの言うところの「自律的自由」を備えた子どもの教育を目指している。つまり、自らが自発的に作った法則を自らに課し、それに主体的に従っていく自由を備えた子どもを育てることである。子どもにとって上に論じた内容を消化することはかなり困難があるように思える。その意味でも、ここで述べられた認識論の課題を教師が子どもたちと共に、例えば一年間、議論を共にしながら、議論を深めていくことは大きな意味がある。カントの書物がそうであるように、そこに書かれてある内容を理解することは、もちろん重要なことであるが、それ以上に、そこに論じられていることの理解を通して、神・人間・世界についての先人の思想と深い思惟の方法と思惟の過程を学ぶことができるのである。中島のこの書もそのような意味をもち、そのような読み方が求められているように思える。

注

1 中島義一 『こども認識論 林檎の味』 紫峰図書 2003年1月31日 131頁-134頁

2 中島義一 『第一編 こども認識論 林檎の味』 文教書院 1924年12月

中島義一 『こども認識論 林檎の味』 紫峰図書 2003年1月31日

3 ヨースタイン・コルデル 『ソフィーの世界』 日本放送出版協会 1995年（日本語版）

4 Immanuel Kant “Kritik der reinen Vernunft”